
白狼

ふじおか。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白狼

【Nコード】

N3593D

【作者名】

ふじおか。

【あらすじ】

”Pid”による犯罪組織が増える中、学校内でのトラブルを解決していくお話。

第五話「ソレ」(前書き)

この話は前フリが長すぎて書いているコツチも読みかえすと長いなあ...と思います。

第五話「ソレ」

「……………」

この沈黙はヒトミのものだ。

部屋割りの後約30分経った所でヒトミはユウの様子を見に行き部屋の様子を見た所で啞然とした。

玄関に入ってすぐに足の踏み場を探す事になり、リビングに向かうと、

テレビはノイズが走り悲鳴をあげていて、机の上にはビデオが無造作にたくさん置いてある。

さらに床下には元々ここにあった古雑誌が散乱。

要するにもものすごく荒らされたような散らかり方だったのだ。

「ヒトミか…どうしたんだ？」

「バツ……………」

ユウは耳を急いで塞ぐ。

「バカー……っ!!」

その声は外にも響いたと言う。

- - - - -

夕飯時になった時にはすでに辺りは暗くなっていた。

「お前…相変わらずカレーなんだな…」

リキトがユウを見て呆れた。

「頭を回す時にはカレーなんだ。日本人なら誰でも知ってるあの偉大なメジャーリーガーだってよく食べてたって話だ。」

「だからって毎回カレー食べてると茶色になるよ？」

ヒトミは嫌味を含んだ口調で言う。
さっきの事で頭に来ているらしい。

「とにかく…俺はちょっと探し物が…あるから後は適当に食べてくれ。なんかあったら言ってな。」

手をフリフリさせてユウは部屋へと戻った。

「もう！…リキト君！レイタ君！人生ゲームやろっ！」

「はっ…はいっ！」

レイタは心底驚きながら答える。

「俺はあのバ力をなだめて引っ張ってくるわ」

リキトはそう言って立ち上がるとユウの部屋へと向かった。

「なんかあの2人変だよね…ホモかしら？」

「それは無いと…」

「まあいいや！さっ！早く人生ゲーム！」

レイタは逃げる方法を考えたが、良い案を絞り込めない自分の頭をポカッと叩いた。

- - - - -

見つからないな…

ボーッと天井を見てるとヌツとりキトが出てきた。

「見つかったか？今回の『依頼』の手がかり…」

ユウはハアっとため息をついた。

「秋元から聞いたからついて来たのか…まだ見つかってない。つていうかここにあんのか？つて疑問が生まれてきた。」

「そうか…本とかに挟んであんじゃねえのか？」

パラパラとページをめくるリクトに

「一番最初に考えて逆さまにしたりしたよ」

とダメダシと言わんばかりに言い、ハアッとため息をつく。

「教科書の見開きのところを破って開くとあったりしてな！」

「なんかクラスに他人の数学の問題書をそれやったバカもいたっけな……」

リクトはそんな事もあったな、と言いながらビリビリ破る。

「お、おい……リクト……？本当にやってるのか？」

「おろ？本当に書いてあるぞ？」

「本当か！？」

リクトはホラッとユウに見せる。

見るとWEBページのアドレス、
もう一つは……

「は……まりとおわ……？」

リキトが掠れてる文字の一文を読む。

欠落しているのはおそらく

「じ」と

「り」

「はじまりとおわり」

と書いてあったのだろう。

その下にはこう書いてあった。

『か……まがかくれ……ぼでかくれ……。

そのあ……みつけ……とする……。

やつらはし……。

あいつの……。

ひがしか……くるまえにかみ……がみつかったらじ……のはじ……り。

とめ……ことなんてでき……い。』

「なんだこりゃ……？オカルトモノの一節か……？」
リキトは言う。

ユウは黙ったまま、下の方を見ている。

下の方に上から強い力で押して書いたような跡があったのに気付き、ユウは鉛筆で擦ってみる。

すると浮かび上がったのは次の一文。

「悲しみを伝え続けていた。」

「本当になんなんだ…?」

ユウは考え込む。

リキトも考えているらしく、座って腕を組んでいる。

「…これは置いておこう。」

次はこのアドレスに書いてあるページ、見てみないか?」

リキトの意見ももつともだ。

ユウはケータイを開きアクセスしてみた。

空と太陽が写っている画像が出てきた。

「なんだこりゃ…ただのプロフじゃねえか…しかも相当古い。」

最終更新日は2/29。しかも15年前の。

ユウは一通りアクセスしてみた。

BBS、いわゆる

「足跡」を残すページ。

それとは別に友達と絡んでいる掲示板らしきもの。

書いた時の秒数まで表示される一言秒記。

コレに何かあるのではないかと見たが見つからなかった。

「手掛かりナシ…か…」

「んなハズねえよ！貸してみろ！」

リキトが無理矢理ケータイを取ろうとする。

「バっ…！無理に引っ張るなっ…て！」

ユウがバツと画面を見ると下の方に、まるで隠してあるかのようにもう一つ、浮かび上がった。

「日記…？」

見てみると飛び飛びだが日記が記されていた。

ユウは一つ一つ見ていくと、ある日の出来事にこう書いてあった。

『黄昏の時

木に囲まれた公園

日が暮れた、と人の気が薄れる遊び場

すべり台

見てみ？

こわいよ』

……
二人の間に沈黙。

「すべり台って……ここにあったか？」

ユウの声は震えてる。

「たしか……その窓から見たような気がする……」
とりきト。

二人は窓から外を見てみた。

二人の部屋の明かりが外に漏れた先にすべり台があった。

「……え？」

二人はそれ以外に言葉が出なかった。
音も立てずにすべり台を滑ってはまた上り、滑ってはと繰り返す影があった。

「…えーつとユウさん？」

小声のリキト。

「なに…？アレについての質問はナシだ」

ユウも小声で話す。

「なんでだよ！俺はアレ…！」

ユウが慌ててリキトの口を塞ぎすべり台を見ると、見なけりや良かったと思うものを見た。

影がこちらに気付き振り向いた。そして、笑った。

ゾクッ！

ユウとリキトは窓からバツと離れると、

扉からバァンと言う音と共に、人の格好のような物をしたヒトとは思えないモノが現れた。

ソレは

「手」を伸ばしユウに向かってきた。

「ダガー!!」

ユウはダガーを出して

「手」を刃で切り裂いた。

「ソレ」は痺れで怯み、

「手」を確かめるように元に戻し始めた。

リキトは好機を見逃さなかった。

「『Hand』!」

リキトがPidを発動し、出したのはグローブ。

とは言ってもボクシングのような物ではなく漫画的にメリケンのような構造をしていた。

「ソレ」にグローブで連打を浴びさせて、吹っ飛ぶ。

「これで終いだあ！」

リキトは鉄を強くこすり、摩擦熱で発生させた火花を使って「ソレ」を燃やす。

クルケケケケエー！！

おぞましい叫び声と共に燃えた

「ソレ」は異様な匂いを発し、痙攣している。

「まだ生きていやがるのか…！？」

リキトはふんずけて起き上がらない事を確かめる。

「急ごう！ヒトミやレイタが危ない！」

ユウが叫び、部屋を飛び出す。それに続いてリキトも飛び出した。

- - - - -

クルルルル…

と、ソイツの喉が鳴る。

突然窓を割り、そこから出てきたヤツはヒトミ、レイタと見て、レイタの方に近付いてきた。

「な、何…よ…コレ…？ユウのイタズラ…？」

ヒトミはガクガクと震えている。

恐怖で震える、などというのは初めてだなんて考える余裕もなかった。

それはレイタにも同じ事だった。頬に割れた窓ガラスで切った傷がついていようがそこから血が出ていようが関係なかった。

「ソイツ」はユウ達が逢ったものとは全く別物だった。

ヒト型をなんとか保っていたというユウ達の方とは違い、こっちは完璧なヒト型だった。ただし、リキトをも上回る大きさと手から生えている剣のようなものを除けば。

ソイツはその剣を伸ばし、レイタの腕を貫いた。
断末魔とも言えるような叫び声がレイタの口から吐き出される。

「嫌ああー!」

ヒトミが叫ぶ。

ソイツは手を伸ばしヒトミを壁にドンと押し付けた。

「く……がつ!」

それだけではなく圧迫し始めた。

本気で潰れるかと思うくらいヒトミの体に圧力がかかる。

ヒトミは声にならない叫びを出し、気を失った。

- - - - -

「ヒトミ! レイタ!」

ユウ達が部屋に転がり入ると、ヒト型のヤツに腕を貫かれたレイタと倒れているヒトミを見た。

「んの野郎っ…！」
リキトが突っ込んだ。

「危ねえ！やめろリキト！」

「ソイツ」はもう一つの手から
「剣」を作り出し、リキトのメリケンを受け止める。

「ぐう…っ！今だ！ユウ！」

リキトは唸りながら言う。

ユウはすぐ声に反応し、跳んでダガーを振り落とした。

ガキィ…ン！

という音と一緒に、ユウ、リキト共々弾き返された。

「くそっ…！頭が…！」

「ソイツ」は硬質化したらしく頭を蚯蚓のような形にして力を集めていた。

「くそっ…！川里！聞こえてるだろ！返事しろ！」

リキトが叫ぶがレイタは反応すらない。
刺されたショックで気絶しているらしい。

「ヤツを倒さなきゃ川里は助けられないか!？」

「だったらこれでどうだ!No.3!」

コウが出したのはボウガン。しかしボウガンの中でも大きい物。

大きい矢はダガーの”雷電”と同じ原理で電気を留めている物だった。

「っけええ!」

雷の矢が高速で飛び、
「ソイツ」に突き刺さる。

が、青い血は流れているが全く効いてもいなかった。

「なんだ…って…？」

ユウは絶句した。

その間にリキトが吹っ飛ばされる。

「リキ…ッッ！？」

ユウは振り向こうとしたが同じように吹っ飛ばされてしまった。

「ソイツ」は出てきた窓から出ようとする。

ま…て…

ユウは立ち上がろうとしたが、それも虚しく崩れ落ちてしまった…

第五話「ソレ」(後書き)

質問があるだろうと考えた事柄を書きます。

何故リキトはユウの裏の顔を知っているか。

非常に、ってか言わなきゃ分からねえよ！

っていう伏線ではありますが、第三話の頭、

ひったくりを捕まえたという事を聞いて笑っただけ、という所。

実はリキトはユウのやっている事を知っていてリキト自身も噂にはならないけど同じような事をやっていた、という訳なんです。

もう一つ。

プロフを15年もほったらかしで削除されないのか？

という点はいくまでもフィクションですので気にしないでください。

では、また次の機会に(・・・) /

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3593d/>

白狼

2010年11月17日05時23分発行